

# 江島為信『古今軍理問答』と『太平記評判秘伝理尽鈔』

— 楠正成の評価をめぐって —

奥井康方

正保二年に『太平記評判秘伝理尽鈔』が刊行されて以後、『平家物語評判秘伝抄』（慶安三年刊）・『甲陽軍鑑評判』（承応二年刊）などの同種の作品が相續いて世に出され、近世初期に軍記評判の類は大いに流行した。江島為信著『古今軍理問答』（寛文五年刊）も、その軍記評判の系譜に連なる。

拙稿「江島為信の儒学と兵学——『古今軍理問答』の「理」——」（『国文学攷』第百八十号、平成十五年十二月、以下「前稿」と略す）において確認したとおり、『古今軍理問答』は、『太平記』をはじめとする数種の軍記物から合戦記事を抜き出し、記事に登場する大将の器量や計略について問答形式で論評したものである。論評の一貫した評価基準である「理」、また背景にある為信の思想に関しては、既に前稿で検討を行った。しかし先行作品との比較対照をとおして

軍記評判のなかの本作品の位置を見定めるにはまだ至っていない。

『古今軍理問答』（以下「軍理問答」と略す）の「凡例」には、

一、凡諸書の評判は、本文に記ざる事をも撃空して載し之。此書のごときは、他を求めず、本文を宗として評し之。

一、凡太平記評判に此書を比するに、理において戻る所多し。たとへば此書には、楠の言行、謀の品々、始に金言を吐ても終に衆愚に同じたる所は楠の非にして、記し之。衆愚の誇々たるは用るにたらざればなり。赤坂の城軍、用水の論、平野将監が降参の評、楠戦死のごとき、其外瀰漫なりといへども一二をあげて例し之。

というように為信自身が先行作品に言及し、特に「太平記評判秘伝理尽鈔」（以下「理尽鈔」と略す）との差異を強調している。「軍理問答」全七巻のうち巻三から巻六の四巻に渡って「太平記」の記事を取り上げるが、同じく「太平記」を論評の対象とし、しかも当時

広汎に流布していた「理尽鈔」に、為信は相当の對抗意識を持つていた。「理尽鈔」との間にいかなる差異があり、その差異に為信のどのような對抗意識が込められているのかが、「軍理問答」の位置付けにおいて最大の問題となる。

右の「凡例」によると、両作品は、まず論評の仕組みが相違する。「諸書の評判」とは異なり「軍理問答」は専ら軍記物の本文に即して論評を加えるというが、その「諸書の評判」に「理尽鈔」は含まれている。「理尽鈔」は、周知のごとく「太平記」に収められていない逸話を「伝云」として載せ、「太平記」本文だけではなく独自に載せる逸話も踏まえた論評を「評云」として記す。そして「凡例」には、「軍理問答」の説く「理」が「理尽鈔」の所説と相異なることは多いとして、その例に楠正成の評価があげられている。「軍理問答」には「楠の非」を記すと述べ、さらに「赤坂の城軍」以下いずれも正成に関連する事柄を列挙しているのは、加美宏氏「太平記評判秘伝理尽鈔」をめぐって」（「太平記享受史論考」、桜楓社、昭和六十年五月）に「正成およびその後継者としての正行らを含めた楠木中心主義ともいふべきものが、「評」的な部分における最も著しい特徴といえるが、この傾向は、「伝」的な部分にも及んでいて、それでも正成ら楠木一族にかかわる合戦譚や治国譚が目立っている」と説明されているような「理尽鈔」の「伝」「評」の性格が、為信の念頭にあったためと考えられる。

為信の「理尽鈔」への對抗意識は楠正成をどう評価するかという問題と密接に関わっていた。本稿では、「軍理問答」の正成の評価を詳細に検討し、論評の仕組みに注意しながら「理尽鈔」と対比することで、對抗意識の内実を解き明かしていきたい。

## 二

個々の合戦での戦いぶりが具体的にどのように評されているかを吟味する前に、ここで「軍理問答」における正成の基本的な評価を確認しておくこととする。「理尽鈔」は正成を理想的な武将・為政者のごとく扱って作品の中心人物とする。「軍理問答」はいかなる位置を正成に与えていたか。「太平記」巻三「赤坂城軍事」についての論評をあげる。

或問「…楠名大将なるがゆへに行<sup>て</sup>謀をめぐらし虎口をまぬがれり。但<sup>た</sup>寄手の行によつて楠を討とるべき理もありや」。

答て云「楠古今無双の大将、敵によつて転化する道を自得したる人なれば、寄手より方便をせばそれに<sup>ふ</sup>応じて防戦あるべし。しかれば楠<sup>たい</sup>に<sup>たい</sup>し行は<sup>て</sup>なりがたしといへども、只今のごとく楠謀の上にて論ずれば、寄手利を得る謀もあらん。…しかれ共楠名人なれば、分数のよき敵と見ば城より人数を引出して出る事は有まじ。城より人数を出したる上に付て論ずれば、此行もあらんか」。(巻三②)

この論評は奇手に対する批判を主とするため、赤坂城に立て籠る正成には大まかな論及しかないが、「古今無双の大將」や「名人」といった正成への賛辞を見ることが出来る。「敵によつて転化する道」を自得した正成を相手に計略を立てるのは難しいと断つたうえで、飽くまで正成は城から総勢を出すと仮定して、奇手の取るべき計略を論じている。「太平記」巻七「千剣破城軍事」の論評でも、

或問「：奇手数十萬騎の勢にて何として城をせめ落す事ならざりけるや」。

答て云「日本開闢以来の名將楠、兵糧用水卓散にて、しかも五徳相應の地に取こもりたれば、中くたやすく落る事有がたし。又奇手の謀つたなき事は十目所視、十手所指なれば論ずるにたらず。道路の僕童も手を打て笑ふ」。…(卷三⑦)

と奇手の稚拙さを非難する一方、正成を「日本開闢以来の名將」と賛美し、その正成が兵糧や用水を豊富に持ち、「五徳相應の地」の千剣破に籠城すれば、簡単には落城しないと述べている。基本的に正成の評価は高かった。「軍理問答」は「太平記」のみならず「保元物語」「平治物語」「平家物語」「甲陽軍鑑」も論評の俎上に載せるが、その「軍理問答」において、並みいる諸將をさしおき最高の評価を得たのが、正成だったのである。

なお正成は、その息正行と比較して「亡父正成においては楚忽の合戦なし。先年天王寺にて宇都宮(公綱)がむかひし時、一度引退

て敵に面目をあたへしを見て、正成の智謀の程を知べし。正行も、其時代の諸將にたくらぶれば随一なりといへども、父正成とは賢愚得失天地雲泥也」(卷五⑩) というように、「智謀」が優れていたといわれている。また正行の弟正儀の論評には「楠正儀、父正成には智のおとれる事を見るべし」(卷六④)とあつて、正成は特にその「智」によつて称賛を受けていた。「軍理問答」では、「理」に適つた計略が賞され、「理」を解する「智」の徳が器量に備つた大將が称揚されることを前稿で指摘した。正成の高い評価はその評価基準に則つたものといえる。

正成自体を評価基準として他の武將の論評を行う「理尽鈔」とは様相が異なるが、「軍理問答」もまた正成を最高の武將と評価していた。「理尽鈔」に対し「軍理問答」には「楠の非」も記すという「凡例」の言も、その共通点を前提としたものと考えねばならない。このことを確認したうえで、以下ひとつひとつの合戦に即した具体的な評価を検討していくが、まずは正成の「非」の指摘に注目し、そこに示された「理尽鈔」との差異を見届けることにしよう。

### 三

和泉・河内の両国を平定して天王寺に出陣した正成は、北条方の討手宇都宮公綱に一旦陣地を明け渡し、計略を以て一戦も交えないまま宇都宮勢を撤退に追い込んだ。その撤退に際し、正成がすぐに

天王寺へ入ったこと（『太平記』卷六「楠木出三張天王寺」事付隅田高橋并宇都宮事）を、『軍理問答』は次のように評している。

或の云「宇都宮がよせたる時は、士卒の心必死なるが故に、楠打とらざる事尤也。盛気たゆみ引退時の宇都宮が勢打とらば、いと安かるべきか。楠いかなる遠慮を以て猶予しけるや」。

答て云「宇都宮引退時の士卒の心は盛気變じて虚となれり。此時にあたり、かねて引退つまりの地形を勘へ、貞兵を伏置待請、不意に起て合戦せば、宇都宮擒にせん事いと安かるべし。いかなる遠慮をもつて宇都宮を安穩に落しつるか、楠の心裏はかりしらず」。（卷三④）

予め宇都宮勢の退路に伏兵を置き、撤退する際の士気の低い敵を不意打ちにすれば、宇都宮を生け捕りにすることも容易であつたとして、実際は何ら攻撃をしかなかつた正成の胸中を訝っているのである。では同じ事柄について「理尽鈔」はどう論じていたか。

○評云、宇都宮天王寺を引かば、楠足輕の弓の兵を出して後に千余騎の兵を備て、敵引かば追懸て是を射、かへさば鳥の散るが如くして引、敵をあくまで惱して後千余騎にて懸んに、敵を河に追ひはめん事立に可レ有。宇都宮が勇には楠深く恐れたりなど申けり。正成是を聞て八尾別当（顕幸）に語て云「宇都宮引ん所を討んと存せば謀はいか程も可レ有にて候。去れ共軍者、敵の氣を深く見るが第一にて候。宇都宮が所存、今度南方

にて某と花くしき一戦をせずして引かへす事、実に無念に可レ存候。…然を各被レ申様に正成軍を立て向んに、宇都宮魚鱗にそなへて足輕の兵を追立て、味方の千の一軍に懸入なば、両虎の戦となつて敵も味方も大半は可レ亡事に候。朝敵宇都宮計に非ずと存て、さてすなをに引せて侍るぞ」と云へば、別当信服すと也。…

冒頭に記されている正成への批判は、宇都宮に攻めかかる好機を逸したとする大筋において、先に検討した『軍理問答』と一致するものである。しかしその後には、批判を聞いた正成が反論を述べる様子が描かれており、そこに顕著な違いが見出される。合戦においては敵の心理を洞察することが第一に重要という考えのもと、宇都宮の油断のない心理を看取して、敢えて追撃をしなかつたと正成は説明する。『太平記』に記されていない内幕を披露しているのだが、正成の説明に八尾別当顕幸は感服したといい、結局正成の判断を「理尽鈔」は肯定していると考えてよい。これは「軍理問答」とは全く対照的といえる。

他の例を見てみよう。正成の家臣平野将監が預かつていた赤坂城が、北条方に用水路を断たれて落城したこと（『太平記』卷六「赤坂合戦事付人見本間拔懸事」）を、『軍理問答』は次のごとく論じる。或の云「…此落城は水の手をとられし故也。此時水の手をとられざる行はあるまじきや」。

答て云、「十町の外より水を城にかけ入事なれば、水の手をとられざる行なりがたし。根本此城の用意理にかなはず。夫城を構る事、用水の便を第一として取立るものなり。しかるに此城内には水なくして、外より樋を以てかけ入事を敵の了簡せまじとおもふ事不覚なり。此城構へ桶かねて吟味有しに、何たる意地にて疎にしたるや心得がたし。事急なる砌にて智者の一失か。」…(卷三⑤)

城外十町の地より水を引き込んでいるため、用水路を敵に抑えられるのは防ぎがたいこと、また元來城は給水の利便を最優先に建てるものであるのに反し、城内で水を自給できなかったことを難点としてあげ、赤坂城の構造を批判している。そしてその責任は、城を建てた当人の正成に帰し、拳兵を急いでいた折の「智者の一失」と判じる。一方の「理尽鈔」の論評は以下のとおりである。

○伝云：…されば此城を用意しける時、(正成が)左金吾(平野将監)に談じて云、「城に籠て敵をふせぐときは水の用意第一にて侍る。自余の物は持運事たやすく候。水は、城中に無くしては他所より運ばれざる者にて候。中々城の外より水を懸入られん事、大に不レ然覚侍る也。其故は只一人知りたる事も天然に人の知る者にて候。…只城の内にかにも深く井をほり給へ」と申す。…左金吾をこがましげに返事して終に是、不レ受、城外の嶺より懸樋にて水を懸入し。…平野若ふして桶が異見を

不レ用、存の外なる不覚してんげり。後代の將たる者分別有べき事にや。…

城の構造に批判を加えるのは「軍理問答」と変わらない。異なるのは、その批判が正成の口から発せられていることである。籠城の準備をする平野将監に、城外から水を引き入れるのは不当と正成は説き、城中に井戸を掘るように勧めたとして、その忠告を聞き入れなかつた平野将監の若さに落城の原因を求めている。「太平記」を補足あるいは訂正する逸話を掲げ、正成の責任を追及しないのは、先の宇都宮公綱との駆け引きの例と同様である。

以上いずれの例においても、両作品は同じような評価基準を以て論評を行っている。それにも拘わらず「理尽鈔」では批判を免れていた正成を「軍理問答」が批判しているのは、「理尽鈔」の逸話を、よるべき事実ではなく、正成の弁護を目的に作られたものと疑っていたからに相違ない。ひたすら「太平記」に即して正成の「非」を論うことで、「軍理問答」は「理尽鈔」の逸話への疑念を表現したのである。正成の「非」を指摘するか否かは、各々の「太平記」に対する姿勢、すなわち論評・評価の基盤である事実認定のし方に、還元される問題であつた。

#### 四

「軍理問答」の正成の評価をさらに別の側面から追究していこう。

先に確認したように、「軍理問答」は正成を最も高く評価し、その点「理尽鈔」と共通するが、それぞれの称賛の内容には差異が認められないだろうか。

次に掲げるのは、赤坂城の陥落に伴い、捕虜となった平野將監が北条方に殺されたこと（「太平記」巻六「赤坂合戦事付人見本問拔懸事」）についての「軍理問答」の論評である。

或の云「一説に、赤坂の降人をば楠方便を以て殺させたと也。国々の官方に見こらしめんための謀なりといへり。此理いかん」。

答て云「夫は、楠が本意にあらず、後人の推量也。楠が耳目手足のごとく平野を助けられなば、楠も一入京都の行の品を聞き、合戦の示し合にもたよりあるべし。智謀相かねたる楠管見になづんで股肱の臣を害と云事なし。そのみならず赤坂の降人は、城を出るといなや、物具を取太刀を奪て、高手小手に戒めしなれば、助置べき心入にあらず。こゝを以て見れば、楠が謀にて殺させたと云は皆附会の説也」。(卷三⑤)

平野將監の助命が叶えば、正成は北条方の計略を聞き出して後の合戦の謀議に役に立てるはずとし、また降参した者たちは城を出てすぐに武器を奪われ縄をかけられたという「太平記」の記述から、北条方にもたら助命の意志がなかったとして、平野將監が正成の陰謀で殺されたとの説を否定している。実は、ここで否定されてい

るのは、「理尽鈔」の載せる逸話である。

○伝云：軍勢の内室は、賀名生の奥、観心寺と云ふ、嶺を通山伏ならでは事問ふ人もなき所に、軍勢一千余騎を相そへて深く忍て彼にをきし。舍弟正氏・和田孫三郎・恩地左衛門・真貴（右衛門助）・渡部五郎等も彼に在り。是は、敵の通路をも切り、弱き陣をば後攻夜討にもせよ、又寄手のたくみをも聞付て城の内へ是を知らせ、人々の妻子をも能はごくめとの為也。されば吉野の城落て後は大塔の宮も此の所に御座有し。又赤坂の城の降人をも彼等が謀にて皆仲時（北条仲時）には切らせしと也。其故は千劍破に籠りし軍勢に二心あらせじが為なり。誠以、城の拵様、前後の方便、前代未聞の事共也。後代の良将何ぞ此の方便を成しめざらんや。（卷七「千劍破城軍事」）

平野將監に赤坂城を預け千劍破城に立て籠っていた正成は、観心寺という場所に、家臣らの妻子とともに弟の正氏たちを潜伏させており、その者たちの画策により、北条仲時に平野將監らを切らせたという。正成の周到な手配りのひとつとして、「理尽鈔」は後代の大将に亀鑑とするよう説いていたのだが、「軍理問答」は、「智謀」の持ち主という正成観にもとづき「後人の推量」「附会の説」などと否定したのであった。

続いて正成の兵庫への下向と戦死（「太平記」卷十六「正成下二向兵庫一事」「正成兄弟討死事」）についての論評を検討しよう。

或問「此合戦の始終、太平記評判に具に記せり。∴しかれども愚案をめぐらし見るに、兵庫にて打死にの事、北方剛勁の勇の偏にやあらん。命を全すべき行あらば、退て謀をめぐらさん事本意ならんか。いかん」。

答て云「楠の打死の事、評判記に尊氏を兵庫におゐて亡す事いと安けれども未来を勘へ討死すと書記せり。言語道断、楠の本意にあらず。誠に作者己が愚案を以て楠が忠信の心を汚せり。子細は、楠尊氏を打ては始終治りがたしと未来を察見せば、など京都において「君は山門へ臨幸なされ、楠は河内へ罷下り、敵を京中へ引入山門と河内より責合せば、尊氏を討戮疑ひあらじ」と行を云べきや。尊氏をいかにもして亡し度所存の有たればこそ右の方便をのべたり。∴しかれども坊門の宰相（清忠）∴兵書の心をしらず、邪義を以て云かすめし故に、力なく楠兵庫へ下向せし也。楠も、要害の地にて方便をめぐらしたば尊氏の大勢をも追なびけるべけれども、兵庫へ下りては海陸の大敵を受地の利あしきが故に勝利なきと知て、死を一途に極め、子息正行へもなき跡までの遺戒をして古郷へ帰したる也。かくのごとく前後の理をも分弁せず、楠が本意を取失ふ事、口惜事也」。∴（巻四⑩）

京に誘い込んだ足利尊氏の軍勢を山門と河内から挟撃するという正成の策が坊門清忠の異見のために用いられず、やむを得ず勅命に

従つて、地の利がなく勝機のない兵庫に下つたと「太平記」にあるのを踏まえ、「尊氏を兵庫におゐて亡ぼす事いと安けれども未来を勘へ討死す」という「理尽鈔」の所説を非難している。「理尽鈔」の作者は、「太平記」の描く正成の「忠信の心」を見落としているというのである。「理尽鈔」の所説は以下のようなものであつた。

○伝云∴正成申けるは「今度の朝敵の事は善々討死を遁ん謀も有りなん。又勝なん謀も可レ有候。和田殿（和田孫三郎）・恩地殿（恩地左近太郎）の如、二宣所一侍りて宜しかりなん。君の御行ひを見るに、叡智の浅事多ければ、今尊氏亡たり共、又義貞天下を奪ひなん。∴正成生て有らんには尊氏は可レ亡。新田が手に死ん事無レ疑。家共に亡なん。王法も亡給ひなんずるぞ。然ば正成死すべき時は今也。身を山林に隠してもながらへんとも存つれ共、一日も君を奉レ背事朝の例として古今に善とせず。又此の後とても奉レ諫たればとて御承引可レ有共不レ思也。∴悲哉、叡智の浅が故に此世如レ是になれり。頼給ふ義貞先以て朝敵、何とも難レ納世の中ぞかし。此事穴賢人に語り給ふな。年月を送るに付てぞ正成左謂し物をと思ひ給ふらめ」。涙を流して申けり。∴○評云、楠申せし所義に当れり。去れ共一命を生て先尊氏を退けて後、新田又朝敵共ならば、如何様にも謀あるべし。早世しけるは最無二心元一とにや。

正成は、兵庫で尊氏を討つ計略も持っていたものの、後醍醐帝の

才知の乏しさに絶望し、尊氏を滅ぼしたとしても新田義貞が天下を奪い、その義勇の手で自分が滅ぼされると予想して、自ら兵庫での戦死を選んだという。「理尽鈔」はこの決断を道理と評価し、正成の死去を惜しんでいたのである。

以上の例では、両作品がともに正成を高く評価しているものの、相反する評価基準に則って、それぞれ異なる理想を正成に見出している。またそもそも事実の認定が異なる。「理尽鈔」の逸話が「太平記」本文を離れて描き出す正成像に対し、「軍理問答」は激しく反発していた。<sup>17</sup>「理尽鈔」は自らの理想を正成の逸話に託す。しかしそれは「軍理問答」の評価する正成像を損なうものにはかならなかった。

## 五

結局、飽くまで「太平記」に基づいて是々非々の評価をするべきだというのが、「軍理問答」の作者江島為信の主張であった。その主張に根差した正成の評価は、「智仁勇」の三徳兼備（「太平記」卷十六「正成兄弟討死事」）をめぐっての次の論評に集約されている。或の云「楠智仁勇の三徳をかねし人なれば、理に迷ふ事あるまじ。いかん」。

答て云「楠を智仁勇の三徳をかねたるとは誰人かゆるしたるや。智仁勇をかねるは聖人也。生智安行の孔子すら、智仁勇は

かなはずと辞したまふ。ましてや日本は夷国にて、人の気質も偏屈なれば、開闢このかた賢人も出来せず。まして智仁勇の聖人をや。楠は、日本におけるは無双の英雄の士たり。智仁勇はいまだし」。(卷四<sup>18</sup>)

為信がその兵学の基礎に儒学を据えることを前稿で指摘したが、ここでは、「智仁勇」を「論語」憲問篇の「子曰、君子道者三、我無能焉、仁者不憂、知者不惑、勇者不懼」に結び付け、三徳を兼ね備えるのは「聖人」のみとする儒学に立脚し、正成はその兼備には至っていないと断じている。「聖人」でも「賢人」でもなく日本における「無双の英雄の士」という評価が、最終的に正成に与えられたのであった。このことは、「理尽鈔」が、

○伝云、古より和朝正成程智仁勇備たる男なし。先数箇所の新恩を給ひしに、侈る事なく、諸人の貧苦をすくいてこそとて、前々の公納十にして二つをゆるす。賦斂以て然也。是皆智仁也。勇は勿論也。○評云、多門天王化生し給ふべき時にしも非ず。人間の中の利根謀才有る男の文を学して理通ぜし男にして、力量人に勝れ仁政を施せし人也と謂し。有る人の云「それこそ多門天王よ。それこそ聖人よ。無レ智人学好めば智者と被レ謂候。敵を払て朝家を守護し奉らば、多門天帝を守護し給ふに非や」と申たりとにや。

などと、正成が三徳を發揮した逸話を載せ、「多門天王」「聖人」と

賛美する「有る人」の發言を以て論評を総括することとは、大きく異なる。「太平記」本文を逸脱して独自の正成像を提示し、そのうえで称賛する「理尽鈔」の論評のあり方に、為信は批判の目を注いでいたのである。「軍理問答」には、三徳を兼備した「聖人」ではないとの正成の評価の後に、次のように記されている。

或の云「今貴殿の出語を聞きに、太平記評判の心とは理において天地懸隔せり。しからば評判記は是にあらざるか」。

答て云「評判記には実の過たるところお、くしてはなだ甚害となる所有。故に吾、評判刪非と云る書を編集せんと欲す。しかれども大望なれば、こゝろざし有ていまだ果さず。しかるゆへに太平記の合戦は一くこまかにしるさず。右の評判刪非の編集成就して後、評判記の理非得失を見得有べし」。

「理尽鈔」には事実を誤っている箇所が多く、非常に有害なものもあるとして、為信は「評判刪非」という書の編集を企図していた。その書を参照すれば、為信の対抗意識はさらに詳細な内実が知られるはずであるが、伝存していないため、計画がそのまま現実のものとなったのかどうかは明らかでない。<sup>21)</sup>

## 六

最後に、以上の検討結果を手がかりとして「理尽鈔」の享受史における「軍理問答」の位置付けを試みよう。

「軍理問答」が刊行された寛文五年当時、「理尽鈔」は事実を伝えるものとしての価値が依然認められていた。「本朝通鑑」(寛文十年成立)が「理尽鈔」を依拠文献のひとつとすることは、加美氏「太平記理尽鈔」と「本朝通鑑」(「太平記の受容と変容」、翰林書房、一九九七年二月)が指摘するところである。加美氏同論考は、「理尽鈔」の所説を批判する書物として、「首書太平記」(延宝八年刊)を早い時期のものとして紹介するが、「軍理問答」はそれに先立つものであった。<sup>22)</sup>

また当時の正成の評価を見渡すと、若尾政希氏(注5所掲書)が山鹿素行や熊沢蕃山など豊富な例をあげて説かれたように、「理尽鈔」の絶大な影響のもとで、正成を賛美する傾向は確かに目立つ。しかし「理尽鈔」と違って正成を絶対視しない視点も存在していたことを、見過ごしてはならない。例えば、中江藤樹「翁問答」(慶安三年、風月宗知刊。引用は尾道市立図書館所蔵本による)は、  
○体充問曰、聖人・賢人・英雄・妍ウツク雄の差別くはしく承度候。師の曰、文武合一の明德十分にあきらかにして、才徳千万人にすぐれ、神明不測の妙用あるを、聖人といふ。三皇五帝、禹・湯・文・武・周公・孔子、これなり。聖人に二等等とりたるを賢人と云。伊尹・傅説・太公・召公・顔子・曾子・子思・孟子・孔明・王陽明など是なり。徳と余の才は賢人に二等等とりぬれども、大将の才は賢人と牛角なるを、英雄といふ。管仲・

楽毅・孫子・范蠡・張良などは是なり。大将の才ばかり遅しく、よの才はみじかく明德のくらきを、妍雄（ヤウ）といふ。項羽・韓信などこれ也。義経・正成などは日本にての英雄なるべし。…（卷三）

というように理想に近い方から「聖人」「賢人」「英雄」「奸雄」との格を設定し、正成を源義経とともに「日本にての英雄」に格付けている。この格付けのし方は、既に検討した「軍理問答」の記述に一致するものである。また山崎闇斎「大和小学」（明暦三年刊、「続山崎闇斎全集」下巻へ松本書店、昭和十二年六月）所収）は、

○知仁勇の三を天下の達徳と云は、人々同じく得る所なればなり。されど氣稟品ことなりて、上品の人はまなばずしてよくし、中品の人は学びて能し、下品の人は学びもし侍らず。三代の後まなびてよくしぬる人は、宋の周茂叔、程明道・伊川、張横渠・朱晦庵にてありける。漢の張良・諸葛孔明、唐の郭子儀などは、三徳にちかき人にてやあらん。我朝の楠多門兵衛は孔明の次なるべし。或は此徳三ながらそなはれりと云るは中庸をよみしらざるにや。（明倫第二）

と「知仁勇」を「中庸」第二十章の「知仁勇三者天下之達徳也」に関わらせ、そのうえで「三徳にちかき人」とする孔明の次に正成を置く。恐らくこれらの儒者の教訓書に「軍理問答」は直接の影響を受けたのであろう。

正成を高く評価しつつも絶対的な称賛はしない視点を儒者は持っていた。当時盛んだった「理尽鈔」の享受と儒者の視点がいかなる関係にあったのかは、近世初期の思想・文学において重要な問題である。儒者の視点を受け継いで正成を批判し「理尽鈔」を批判した「軍理問答」は、正成の評価という点における「理尽鈔」と儒者の対立を端的に表して見せた。「参考太平記」（元禄四年刊）が「理尽鈔」を取るに足らないものとして切つて捨てるように、後に「理尽鈔」の享受は下火となるが、その享受の変遷は、儒者の正成の評価に目を配ることで辿りやすくなるのではなからうか。

注

(1) 前稿に「凡例」の全条を掲げたが、今回引用する部分は詳細に検討していなかった。以下「軍理問答」の引用は国立国会図書館蔵本による。適宜、仮名の濁点や句読点・中黒・カギ括弧などを補い、段落を設けた。ルビは省略または補足し、補ったルビは（ ）で囲んだ。原文に不審のある箇所は右傍に（ママ）を付した。（ ）内の注記は全て引用者による。中略箇所は…で示した。

(2) 「軍理問答」全巻全章の合戦記事の典拠は前稿の表にまとめた。その表では各章に巻ごとの通し番号を付したが、本稿でもその番号で引用する記述の所在を示す。例えば巻一第一章は巻一①と表す。

(3) もっとも「伝」「評」の区別は必ずしも明確ではなく、「伝云」以下に論評を含めることもあれば、「評云」以下に逸話を付加することもある。また「理尽鈔」は、巻頭で「太平記」の成立事情を説き、それに沿って「太平記」本文の虚構を逐一指摘し、自らが事実とする逸話を提示すると

いう姿勢を一貫してとっている。このことは、今井正之助氏「太平記評判秘伝理尽鈔」の叙述姿勢」（『日本文化論叢』第三卷、一九九五年三月）に詳しい。

- (4) 「軍理問答」は正成の登場する「太平記」の記事を以下の七章で取り上げる。典拠となった「太平記」の巻と章名を括弧内に記す。卷三②（巻三）「赤坂城軍事」・卷三④（巻六）「楠木出陣張天王寺」事付隅田高橋井宇都宮事」・卷三⑤（巻六）「赤坂合戦事付人見本間拔懸事」・卷三⑦（巻七）「千劍破軍事」・卷四⑦（巻十五）「正月二十七日合戦事」・將軍都落事付栗原丸婦京事」・卷四⑧（巻十五）「大樹撰津国豊島河原合戦事」・卷四⑩（巻十六）「正成下向兵庫一事」「正成兄弟討死事」。このうち巻四⑧を除く六章に正成に対する論評のなかで正成に言及する章として、卷三⑨（巻八）「摩耶合戦事付酒部瀬河合戦事」・卷五⑩（巻二十五）「住吉合戦事」・卷五⑪（巻二十六）「正行参吉野一事」「四條畷合戦事付上山討死事」「楠正行最期事」・卷六④（巻三十四）「新將軍南方進発事付軍勢狼藉事」「竜泉寺軍事」・卷六⑤（巻三十四）「平岩城軍事付和田夜討事」・卷六⑦（巻三十六）「秀詮兄弟討死事」があり、参考に用いる。

- (5) 若尾政希氏「太平記読み」の時代「近世政治思想史の構想」」（平凡社、一九九九年六月）第一章「近世初期における楠正成像の転換」は、「理尽鈔」が正成を「諸將らの兵法の師」「理想的な為政者」と規定している」と説明する。このように正成を別格とすることに伴い、「理尽鈔」は、しばしば正成の談義などに言及し、それを規範とするよう説いている。

- (6) 「三略」上略の「變動無常、因り転化」にもとづく。正成がこれを自得したというのが「太平記」のどの記述を踏まえているのかは不明。ただし「理尽鈔」が「太平記」巻六「楠木出陣張天王寺」事付隅田高橋井宇都宮事」を取り上げ「○伝云：然る所に京都より西六波羅は不レ向、

諸国のかり武者、公事武者、彼是都合して一万余騎にて下すと云しかば、楠敵に因て転化して天王寺へ引退く事、如レ書（『太平記』）「智謀せし物也」と記している。以下「理尽鈔」の引用は高知県立図書館山内文庫所蔵本（国文学研究資料館のマイクロフィルム）による。引用時の処置は「軍理問答」と同様だが、本文の片仮名表記は平仮名に改め、ルビなどの傍記は片仮名のままとした。また「理尽鈔」の巻及び章は、「太平記」に準じるものであるため、記述の所在に関する注記は適宜省略した。

- (7) 「理尽鈔」は、正成が総勢五百騎を城から出したという「太平記」の記述を虚構とし、二百騎を城内に残して三百騎で敵を追い立てたというのを事実と主張するが、その正成の計略をやはり高く評価している。

- (8) 「太平記」には千劍破城周辺の地形をこのように表現している箇所はない。「理尽鈔」に「○伝云：千劍破を拵し始、正成云「首将大勢にて向ふに謀を回して防ぐには、深山にそふたる城にしくはなし。何くに其利なる地の可、有と思て大和・河内の山々を見るに、金剛山葛城の麓にこそ千劍破と謂峰一つあれ。五徳相應の地なり」とて是を城とす」とあるのによったか。

- (9) 「理尽鈔」も、大軍に包囲された正成の心中について「○評云：楠が智の最賢ければ、万々の軍勢にて寄せたり共なじかは驚んや」と論じ、正成を讃えている。

- (10) 正成を正行・正儀と比較した記述として、他に「楠（正行）は、死を一途に窮る事を知て、功を万代にのこす事をしらず。智謀も又いたらず。何ぞや武蔵守（高師直）に対し、主上股肱の臣とたのみおほしめす楠にてかく死をかるくせしは、正成の本意にもたがひけるかといと浅まし」（巻五⑩）・「とも角にも和田（正武）・楠（正儀）父祖の智謀には抜群おとりけるとぞ見えし」（巻六⑤）があり、やはり正成の「智」が秀でていたとされる。

(11) 「太平記」(引用は貞享五年刊本へ元和五年刊本の再版、萩市立図書館所蔵)による。「楠は元來勇氣智謀相兼たる者なりければ」(卷七)。「楠木は元來勇氣無双の上智謀第一也ければ」(卷十五)というように、「智」とともに「勇」の観点から正成を讃えているが、「軍理問答」には正成の「勇」を称賛する例は見られず、飽くまで「智」の点に限定した評価と考えられる。「軍理問答」は、基本的に「太平記」に依拠しながら、評価の段階では「太平記」を批判する姿勢をとっていた。

(12) 若尾氏注5所掲書に「理尺鈔」では正成の合戦や言動を引き合いに出して、いわば正成を価値判断の基準にして諸將を厳しく論評しているのである(第一章)という指摘がある。「理尺鈔」の評価基準すなわち正成像と、「軍理問答」の評価基準との共通点や相違点については、後に詳述する。

(13) この点、「軍理問答」は「楠が一先天王寺を引たる心は、兵書に『百戦百勝非善之善者』也。不戦而屈二人之兵善之善者也」(孫子)謀攻篇と云理に倣せり」(卷三④)、「理尺鈔」は「○評云：正成が謀最深し。是ぞ真の良將と可謂。此様の軍には、負て勝、勝て負ると申事有也。是なるべしと思て、天王寺を引取て後、漸々血氣の失せんずる時を計すまして、嶺々に篝火を焼きて蒸たるなるべし。最可也」というように、両作品とも同様に高く評価する。

(14) 「太平記」には登場しないものの、「理尺鈔」においてその活躍が描かれる人物。正成の家臣。「理尺鈔」には、正成の家臣として他にも思地左近太郎・志貫右衛門助・渡辺五郎らが登場する。

(15) また正成が自分の戦死を偽装するため、律僧に扮した三十三人の者について、「軍理問答」は、三十三人という大人数のうちに機密を敵に漏らす者が出ると論じる(卷四⑦)が、「理尺鈔」は、泣き真似の上手な男が

律僧に成りすまし、その男と本来の律僧を合わせた三四人により難なく偽装工作が成就したと記す。なお人数の問題に関して、「軍理問答」は、「五十万騎百万騎と」(太平記)に云は皆作者の筆法実を過していつはれり。しかれども其時の人数の多寡、擲なければ勤へがたし。評判記などには人数つもりを書記といへども、是も推量を以て書たるなれば信じがたし。只人数有余不足の事は其通に見て理をとるにはしかじ」(卷五⑩)と述べ、「太平記」に疑いを持ちながらも、それによるしかないとの立場をとっていた。

(16) ただし「理尺鈔」とは異なる評価基準において「軍理問答」が正成の「非」を指摘する場合もある。正成が勅命に従つて足利尊氏を迎え撃つために兵庫へ下つたこと(太平記)卷十六「正成下向兵庫事」について、「軍理問答」は「たとひ兵庫において防戦をいたせと強て勅定有共、理にかなはずは、義貞と楠合体し都へ引返し、楠の謀のごとく主上山門へ幸なり楠は河内へ下り合戦せば、勝利有べきを、君命をまもり過したる失有。…さてこそ兵書にも「戦道必勝、主曰無戦、必戦可也。戦道不勝、主曰必戦、無戦可也」(孫子)地形篇」と云はこ、ならずや」(卷四⑩)と批判するが、「理尺鈔」では、正成が勅命に従わないということがそもそも想定されていない。

(17) また赤松則祐の桂川での先陣(太平記)卷八「摩耶合戦事付酒部瀬河合戦事」を正成が称賛したという「理尺鈔」の逸話は、「軍理問答」において「かく計無穿鑿の則祐が先陣を楠称美したるとは、後人の附会の説、楠が本意にあらず」(卷三⑥)と批判されている。則祐の先陣を「軍理問答」は「何ぞや円心が子として、一手の将たる者が一騎川に乗込と云事、匹夫の働、将の器にあらず。大聖孔子「暴虎馮河而死、無悔者不レ与」(論語)述而篇」と子路をいさめられしはこ、也」と評する。正成の新田義貞への諫言(太平記)卷十六にその「暴虎馮河」云々が引用され

ており、それを踏まえて、則祐の先陣を正成が称賛するはずはないと断じたものと思われる。前稿で指摘したように、「軍理問答」では、「勇」が悉く指揮的となる。これに対し「理尺鈔」は「○評云：軍の勝負は第一将の智謀・勇・仁によれり」（巻四「備後三郎高德事付呉越軍事」）。「○評云：正成云「現にも角にも将は勇と生得の才智とこそ願はしく候へ」と申せば、長俊（名和長俊）も千葉（信介）も高氏（尼利高氏）も是を信ずと也」（巻六「楠木出三張天王寺」事付隅田高橋并宇都宮事）などと、「勇」を大将に必要なもののひとつとする。

(18) ただし「軍理問答」にも、「太平記」に見られない逸話を記す箇所がある。千剣破城に関して「此城を資落さんには一の大事有。城中の用水に毒を入なば自滅に及ばん。：「此行を奇手の内に知人有なば、此城にて大功を立る事なるまじと、寝食を安んぜざりし」と正成子息の正行にかたられしとなり。此大秘伝の方便、楠子息正行より外伝授なかりし也」（巻三〇）というが、城中の用水に毒を入れる方法が正成から正行に伝わったというのが何に依拠するかは未詳。

(19) 林羅山「三徳抄」（成立年未詳、日本思想大系28 藤原惺窩 林羅山）所収に「夫、心三疑ナキハ、智也。心ニヨク分別シテ後悔ナキハ仁也。心剛ニシテ強キハ勇也。此智ト仁ト勇トハ、聖人ノ三徳也。故ニ論語ニ孔子ノ、「智者ハ不レ惑、仁者ハ不レ憂、勇者ハ不レ懼」トイヘルハ是也」とある。

(20) 儒学の立場から正成を批判し、是非をあわせ論じる姿勢は、楠正儀に對する論評の「慥かな、楠父子あいつひて仁心・仁聞ありといへども、兵乱にいとまあらず、道の本体を見ず。此善心をおしひるめ、充しめば、天下の民婦服せん事たなご、ろをかへすが」とけん。おしむべし〜」（巻六〇）にも表れている。

(21) 為信は、「楠兵庫記」（明暦元年刊）の各条に批判を加えた「闕疑兵庫

記」（寛文七年刊）を著している。「楠兵庫記」は、正成が兵庫に下る際正行に与えた教戒という体裁の軍書で、「理尺鈔」と直接の関係はない。「闕疑兵庫記」の検討は稿を改めて行いたい。

(22) 加美氏は、「首書太平記」のような刊行された書物のほかに、石橋生庵「家乘」寛文十一年十月十二条の「持太平記評判而使於精舎先生云此書也近世好事者妄作之其中之典故不足信用焉云云」との記事を紹介している（近世太平記読みの形成、「太平記の受容と変容」所収）。

(23) 長沼澄斎「兵要録」（寛文年間成立、「長沼流兵法 日本兵法全集4」所収）も「本朝楠正成、千剣破城を守り、炬火を投じ雲梯を焚き、偶人を設け敵を誘ふ。京師の戦ひ、僧をして遺屍を需め戦死を誑はらしめ、以つて敵の怠惰を伺ふ。且つ罪に当れば、則ち親戚を許さず。是れ又火変詐重刑、共に用ひて棄てず。然るに純臣の名を降さざるや、是れ皆正道に抱り」（巻之二「兵談下」）云々と正成を絶賛している。「親戚を許さず」とは、「理尺鈔」が正成の養子として平野将監を紹介し、その殺害に正成が関与したとすることを指していると思われる。

(24) 「氣質理利之解」（成立年未詳、「増訂蕃山全集」第五卷へ昭和五十三年十月）所収、同書解題は熊沢蕃山著の確証はないとする。「楠正成、三徳兼備の人といへり。五氣共にひとしく受て、君子の氣質也。然共道学なき故に、質勝て文をとりりや、室鳩巢「駁台雜話」（享保十七年成、寛延三年刊、引用は「日本隨筆大成」第三期第六卷所収の本文による）巻之四「智集」の「但正成かくのごとく絶倫の材をもて、聖賢の道を学びずして、孫呉が術をのみ崇びしは、遺恨といふべし。湊川にて自殺するとして、弟正季と最後の一念を語る事はなほだ陋し」も、同様の発想か。

〔付記〕

本稿は平成十七年度広島大学国語国文学会春季研究集会（六月二十六日）における口頭発表をもとに加筆してまとめたものです。発表の席上ご指導を頂きました諸先生方、各所蔵機関に厚く御礼申し上げます。

—おくい・やすまさ、呉青山中学・高等学校専任講師—